

『ゴラクナート語録』研究

「パド：ラーグ・ラーマグリ」(1-10)の
本文と和訳

橋本泰元

はじめに

本稿は『東洋学論叢』第35号の拙稿に引き続いて、Pitāṃbaradatta Barāthvāla, *Gorakha-Bānī*, Prayāga: Hindī Sāhitya Sammelana, 2017 (=1960, tritīya saṃskaraṇa) [prathama saṃskaraṇa 1942] 所収の、ゴラクナートによる教説の詠歌パド (pada) の本文を提示しその和訳を行う。この詠歌パドは、音楽の旋律ラーグ (rāga) の名の下に次のように分類されている。

rāga-rāmagrī : 1-32篇, rāga-āsāvārī : 33-48篇, rāga-rāmagarī : 49-60篇, āratī : 61-62篇。

本稿では、紙幅の都合によりこのうち、rāga-rāmagrī : 1-10篇を扱う。なお、前号と同様に、訳文中の () は筆者の言い換え、[] 内は筆者による補足を、*は筆者の訳注を示す。

本文と和訳

pada

(rāga-rāmagrī)

cāri pahara ālaṅgana nindrā saṃsāra jāi biṣiyā bhāhī /
ūbhī bām̐ha goraṣanātha pukārai mūla ma hārau mhārā bhāhī / ṭeka /
〔夜の〕四更 (午後6時から朝6時) のあいだ抱擁と睡眠して、

(18)

世界は〔感官の〕対象に流される。
両腕を高く上げてゴーラクナートは叫んで説く、
根本を失うな、わが兄弟よ。(繰り返し) *

*原著者は「根本」を、ハタヨーガが説く「精液」と解釈している。

amāvasa paṛivā mana ghaṭa sūmnām sūmnām te maṅgalavāre /
bhaṇatā gumṇatā brāhmaṇa beda vicārai dasamī doṣa nibārai //
1 //

新月・朔月のとき心と身体は虚ろであり、
空虚となって火曜日〔の誓戒をなす〕。*
〔白半月の〕第10日目にブラーフマンはヴェーダを説き讃え、
考察するが、〔ヨーガ行者は身体の〕穢垢を払う。

*第1行の意味を原著者は、ヨーガ行者が虚空に心身を精神集中させることは、新月・朔月を祝うこと、すなわち彼らが修行を行わないことを意味し、このことが「火曜日の誓戒 (vrata)」でもあると、解釈している。

paṛavā ānandā bijasi candā pāmcom lebā pālī /
āṭhami caudasi brata ekādasī aṅgi na lāum bālī // 2 //

朔月に歓喜〔を覚え、白半月〕第2日目に月を見て、五〔知覚器官〕を
〔感官の対象から〕護るべし。
第8日目、第14日目、第11日目の誓戒で、乙女に触れるべからず。

saṁmī saṁjhaiṁ soibā mañjhaiṁ jāgibā ṛsandhi deṇaṁ paharā /
tīni pahara para doi ghaṭa jāibā tihām chai kāla cā herā // 3 //

眼前が黄昏で寝ても内面では起きていよ、
三更（9時間）は見張っておれ。
〔夜の〕第三更（0時から3時）から二更が減れば、
そこにカーラ（死）神の使者〔がいる〕。

bāṁmām aṅge soibā jamacā bhogabā saṅge na pīvaṅām pāmṅīṁ /
imatau ajarāmvara hoi machindra bolyau goraṣa bāmṅīṁ

// 4 // // 1 //

女性を抱いて寝ればヤマ神の供物〔となり〕、

〔女と〕ともに水を飲むべからず。

このように不老不死となれマツツエーンドラよ、

ゴーク [ナート] は説いて話す。

chāmṅai tajau gurū chāmṅai tajau tajau lobha moha māyā /
ātmām paracai rāṣau gurudeva sundara kāyā // ṭeka //

分けて (触れずして) 捨てよ、師よ、分けて捨てよ、

捨てよ、貪欲・愚痴・迷妄 (マーヤー) を。

アートマンを悟れ、師よ、美しき身体を [保て]。(繰り返し)

kāmṅhīm pāva bheṭilā gurū bidyānagra saim /
tāthaim maīm pāilā gurū tumhārā upadesaim // 1 //

カーンハ・パーダにお会いした、師よ、

ヴィディヤー・ナガラ (明知の街) から [やって来た]。

あの人から私は、師よ、あなたに関する知らせを受けた。

etaim kachū kathilā gurū sarbai bhailā bholai /
sarba rasa ṣolā gurū bāghamṅī cai ṣolai // 2 //

この人が語ったことで、師よ、すべて明らかとなった。

〔あなたは〕すべての〔不老不死の〕甘露を失った、

師よ、雌虎 (マーヤー) に抱かれて。

nācata goraṣanātha ghūṅgharī cem ghātaim /
sabaim kamāi ṣoi gurū baghanim cai rācaim // 3 //

ゴークナート [はいう]、[踊り子の] 足鈴の音に合わせて踊りながら。

すべて獲得したものを失った、師よ、雌虎の作り事によって。

rasakusa bahi gailā rahi gāi choi /

(20)

bhaṇata machindranātha pūtā joga na hoī // 4 //

汁・髓が流れてしまって、滓が残った。

マツエーンドラの息子（弟子）はいう、

〔これでは〕ヨーガはあり得ない。

rasakusa bahi gailā gailā sāraṃ /

badanta goraṣanātha gura joga apāraṃ // 5 //

汁・髓が流れてしまって、本質が残った。

ゴーラクナート師は語る、〔これが〕無上のヨーガ。

ādinātha nātī machindranātha pūtā /

ṣaṭpaḍī bhaṇīmlai goraṣa avadhūtā // 6 // // 2 //

アーディナートの孫弟子、マツエーンドラナートの弟子。

六行詩で教え説く、遁世者ゴーラクは。*

*六行詩 (ṣaṭpaḍī) は、チャツパエ (chappay) とも呼ばれて教説・物語詩に多用された。その構造は、拍 (mātrā) で計る韻律で、前半の4行はローラー (rolā) 韻律 (6 + 4 × 4 + 2 = 24拍、最後の音節は長拍、休止は第11拍目) で、後半の2行はウッラーラー (ullā) 韻律 (第1・3脚が4 × 3 + 3 = 15拍、第2・4脚が6 + 4 + 3 = 13拍) でなっている。

suṇaṃ ho machindra goraṣa bolai agama gavamṇa kahūṃ helā /

nirati karī naiṃ nīkā suṇijyau tumhe satagura maiṇ celā // ṭeka //

聞け、マツエーンドラナートよ、ゴーラクが説こう、来去はどこから
闖入してきたのか。

愛着もてば好く聞こえる、〔かつて〕あなたが正師で私が弟子〔だった
から〕。(繰り返し)

kāmmanī bahatā joga na hoī bhaṅga muṣa paralai ketā /

jahāṃ upajai tahāṃ phiri āvaṭai cyantāmani cita etā // 1 //

愛欲に流れればヨーガはあり得ず、なんと崩れてしまったことか。

生まれたところに再び戻る，如意宝〔の如き〕心という鹿は。*

*この行の後半句について，原著者は *cyantāmani* (<*cintāmaṇi*) を *cetāvānī* と読んで，「心を警戒しなければならない」の意味に解釈している。この場合，「心」は落ち着きのないものとして「鹿」という直喩が使われていると理解できるが，それに「如意宝」という修飾句がそぐわないように思われ，難解である。

dvādaśa ṣoṛi ṣaṭāmṇām̐ nausata jīva sīva nā bāsā /
caudaha brahmāṇḍa nau eka daṁma hai ima hīm̐ jāi nirāsā // 2 //
 第12日目に沐浴し，第16日目に個我とシヴァ神がいなくなる。*
 14のブラフマーンダ（全宇宙）にはたった一つの生命があり，ヤマ神は絶望して立ち去る。

**ṣaṭāmṇām̐*の意味が原著者も解説しておらず，また種々の辞典からも意味が推測付かず不明である。原著者は *dvādaśa ṣoṛi* を「日食」，*nausata* を「月」と解釈して，この1行を「日食から月を遠ざけよ，個我とブラフマンが一体となるように」と解釈している。

pavana kā nīra le ambara dhovai svāsaim̐ usāsai āyā /
bhaṇata goraṣanātha ima hoi nirantara bījaim̐ baṭaka samāyā
// 3 // // 3 //

清浄な水で衣を洗って，ほっと一息つけた。

ゴラクナートは言う，このように常にあれば，種子に木が収まる。*

*「種子に木が収まる」は，現象世界が源泉の種子に還滅することと考えられる。

bolyā goraṣa ghara joī ye tata būjhai biralā koī mere gyām̐nīm̐
// ṭeka //

家を訪ねてゴラク〔ナート〕は語った，

この真実を稀なる人が理解する，私の知者よ。（繰り返し）

(22)

jojyau jøjyau re jahūmbā bana jøjyau tatta rāṣyaum tariyāli /
āṣaṇa indrī jeṇai āpa basi rāṣyām teṇai pāyā
sarba nirantara mere gṭāmnīm // 1 //

おのおのの個我があるところに個我の集積 [がある]、
三つからなる要素を護れ。*
坐法と感官を自らの力で統御する者は、
常にすべてを獲得した、私の知者よ。

*jojyau は原文のように、一語では辞書に記載がなく、jo と jyau の二語に分けて解釈すると、jo は関係代名形容詞、jyau は jīva (個我)の変形と理解できる。また、tariyāli は tri+yāli (vāli < vālā) と理解した。いずれにせよ難解であり、原著者は、一節を解釈していない。

mana māhaim teṇaim tana tāryām mana bisavāsaim milaṇām /
mana maim kumbha kalasa rasa bhariyā teṇaim
manavaim alaṣa lāṣāyā mere gyāmnīm // 2 //

心の中で身体を解放したら、心に信頼の念が得られた。
心の中の壺に甘露を満たしたら、心の中に不可視なるもの(真実在)を見た、私の知者よ。

pai re jōi nai edvā puriṣa padhāryā puriṣa nau pāriṣā pāi /
puriṣai mili puriṣa rasa rāṣyā puriṣaim
puriṣa nipāyā mere gyāmnīm // 3 //

しかし、おい [兄弟よ]、ひとつのプルシャを [心に] 勧請した者は、
プルシャの覚知を得た。
プルシャにプルシャを合わせて甘露 (ブラフマンの歓喜) を味わった者は、
プルシャによってプルシャを起こした、私の知者よ。

jīhi ghari canda sūra nahim ūgai tihim ghari hoṣi ujjārā /
tīhām je āṣaṇa pūrau tau sahaja kā bharau piyālā mere gyāmnīm
// 4 //

月，太陽が昇らない家に，光輝があれば。

そこで坐法を修すれば，サハジャ（俱生）〔の歡喜〕が器を満たす，私の知者よ。

mana māṃhīlā hīrā bīdhā so sodhīnai līṇāṃ
so śāṃṇāṃ so pīvaṇāṃ michindra /
prasādaiṃ jaṭī gorāṣa

bolyā bimala rasa jōi jōi naiṃ milaṇāṃ mere gyāṃnīm

// 5 // // 4 //

心の中に追い求めていた鹿が傷ついている，その〔鹿〕が食べ物であり
飲み物である，マツツエーンドラ〔ナート〕よ。

恩恵深く行者ゴーラク〔ナート〕は語った，無垢なる甘露をおのおのが
得られるのだ，私の知者よ。

gorāṣa jogī tolā tolai bhīṛi bhīṛi bādhīlai ratana amolai // ṭeka //

ヨーガ行者ゴーラクは，慎重に量って高価な宝石を包んでいる。

（繰り返し）

āchai āchai bida na paṛibā kandha /

lāṣa tolā mola jāya je eka ṣisai binda // 1 //

不壊なるビンドウがあれば，身体は壊れない。

十万トローラー〔の宝石〕が売れて，ひとつのビンドウが壊れる。*

* トローラーは約12g. この行の意味は難解である。原著者も解釈を加えていない。

jaisī mana upajai taisā karama karai /

kāṃma krodha lobha lai saṃsāra sūṃnāṃ marai // 2 //

心に浮かんだように，行為をなすがよい。

愛欲・怒り・貪欲によって，世間は虚しく滅びる。

gagana ṣiṣara āchai ambara pāṃṇīm /

(24)

maratām mūḍhām lokām marama na jāṃṇīm // 3 //

虚空の頂点（ブラフマランドラ「頭頂の孔」）に甘露の水がある。
死んだ愚かな世間は、精髓を知らない。

pūnima mahilā candā jima nārī saṅgai rahaṇām /
gyāṃna ratana hari līṇha parāṃṇām // 4 //

望の月のように、女をともにした〔男性の〕状態である。
知恵という宝を奪い去った、生類は。

ādi nātha nātī machindra nātha pūtā /
byanda tolai rāṣīle gorāṣa avadhūtā // 5 // // 5 //
アーディナートの孫弟子、マツツエーンドラナートの弟子。
ビンドウを量って護った、遁世者ゴークは。

sonām lyau rasa sonām lyau merī jāti sunārī re /
dhamaṇi dhamīm rasa jāṃmaṇi jāṃmyā
taba gagana mahā rasa miliyā re // ṭeka //

金を取れ、甘露という金を取れ、私のジャーティは金細工師だ。
ふいごを吹いて甘露が溜まりに溜まった、すると虚空（頭頂の孔）で偉
大なる甘露が得られた。（繰り返し）

āpaim sonām nai āpa sunārī mūla cakra aṅṅīṭhā /
aharaṇi nāda naim byanda hathaurā gaṭisyūm gagana baiṭhā
// 1 //

自身が金で自身が金細工師、根底の輪円（チャクラ）が坩堝。
金床がナーダでビンドウが金槌、虚空を玉杓子にしよう。

aṣai āraṇa nai viṣai koilā sahaja phūka do naliyām /
canda sūra doū sami kari rāṣyā āpai āpa ju miliyā // 2 //
不朽の森に炭が散らばっていて、二本の脈管を通してサハジャ〔なる炎〕
を吹き起こせ。
月と太陽ふたつを一緒にしておけば、自ずと自己（個我）が得られる。

ratī kā kām̐ma māse kī corī ratī maim̐ māsa corai /
 māsa cori rahai māse maim̐ ihi bidhi garathaim̐ jorai // 3 //

トウアズキの実の役はマーシャアの代用，トウアズキのなかにマーシャアを隠せ。

ケツルアズキの中にマーシャアを隠し続けろ，こうして手持ちのお金を集めよ。*

*トウアズキの実は，かつて重量単位に使われ，約0.1214g. 原語 māsa を māśa (「ケツルアズキ」の意味) あるいは māśā (マーシャア「重量単位で約1.04g., トウアズキの実8個分の重量」の意味) と理解して，いちおう訳し分けた。語呂合わせになっているようだが，どちらの訳を充てたらよいか判然としない。

aradhe sonām̐ uradhai sonām̐ madhye sonam sonām̐ /
 tīni sunyam̐ kī rahaniṁ jānaiṁ tā ghaṭi pāpa na puṁṅṅam̐ // 4 //

内も金，外も金，真ん中も金，金。

〔これら〕三つの無い生き方を知れば，罪も徳も生じない。

unamani ḍāṅḍī mana tarājū pavana kīyā gadiyāmnām̐ /
 āpai goraṣanātha joṣaṇa baiṭhā taba sonām̐ sahaja samām̐nām̐
 // 5 // // 6 //

ウンマニー (至高の三昧) を棒に心を秤に [して]，氣息を6マーシャアの錘にした。

ゴークナートは自ら量った，すると金はサハジャ [の状態] に収まった。

jām̐ṅṅaniṁ josi jōnai vicārī pahalām̐ puriṣa kai nārī jī // ṭeka //

知者の占星術師よ，見て考えよ，最初に男が [生じたか]，
 それとも女か。(繰り返し)

bāi nahim̐ tahūmvām̐ bādala nāhim̐
 bina thābhām̐ bābai maṅḍapa raciṅyā /

(26)

tihām āpa upāmvana hārī jī // 1 //

風なく雲もないところに、尊師は柱なしの神殿を建てた。
そこに、自ら生起する女性がいる。

bāpa nahīm hotau tihyām baiṭhaṇarai re mātā bāla kumvārī jī /
pīvanaim pauḍhyao mājhau pālanaim

tihām hūm hīm ja hiḍōlamna hārī jī // 2 //

父親がいないときでも存在していた、母なる乙女が。
〔彼女は〕愛する夫を揺りかごに寝かしつけ、そこでブランコを揺らす
女となった。

brahmā biṣṇa naim ādi mahesvara ye tīnyūm maim jāyā /
ina tihuvām nī maim ghara gharaṇīm dvaikara morī māyā jī

// 3 //

ブラフマー、ヴィシュヌ、根本のマヘーシュヴァラ、これら三つは、私
が生んだ。
これら三人の家で私は家内であり、〔彼らの〕両手には私のマーヤー
（幻力）がある。

gaṅga jamuna morī śāṭalarī re haṃsā gavana tulāi jī /
dharani pātharaṇāum naim ābha pachevaraum

tau bhī saurī na māi jī // 4 //

ガンガー、ヤムナーは私の寝台であり、個我の行方を決めた。
大地、岩、そして水（全世界）は〔私の〕拡がり、それでも敷布には足
らない。*

*原語 pachevaraumを原著者は pachyoraの変形と解釈しているが辞
書で確認できないので、原著者の訳に従った。また原語 saurīについ
ても同様である。

śaṅḍataḍi māmjhau janama badītau cāmvara sām̐bi na sārī jī /
machindra prasādaim̐ jatī goraṣā bolyā ye tata joōbicārī jī

// 5 // // 7 //

挽き臼を引いているうちに生が尽きたが、米をきれいに搗けなかった。
マツエーンドラよ、恩恵深い行者ゴーラクは語った、この真実を見て
考えよ。

cālyo re pāmcau bhāilā teṇaim̐ bana jāilā

jahām̐ duṣa suṣa nām̐va na jāniye // ṭeka //

さあ、5人の兄弟（5感覚器官）よ、行こう、苦・楽という名前すらない森に。（繰り返し）

ṣeṭī karaum̐ tau meha bina sūkai / baniija karaum̐ tau pūñjī tūṭai

// 1 //

田畑を耕せば雨がなく乾く。商いすれば財産が崩れる。

astrī karaum̐ to ghara bhaṅga hveilā /

mim̐tra karaum̐ tau bisahara bhailā // 2 //

武器を持てば家が散り散りになる。友情をなせば毒を持つ蛇になってしまふ。

juvaṭai ṣailaum̐ tau baiṭharaum̐ hāraum̐ /

corī karaum̐ to pyaṅḍaraum̐ bhāraum̐ // 3 //

博打をすれば積み金を失う。盗みをはたらけば団子で重たくなる。

* baiṭharaum̐ を bīṛa と解釈して訳した。後半の pyaṅḍaraum̐ を piṅḍa と解釈して「団子」の意味にとったが、「身体」の臣もあるので、「身体が重くなる」とも読める。

bana ṣaṅḍa jāum̐m̐ tau biracha na phalanā /

nagarī maiṃ jāum̐m̐tau bhiṣyā na milanām̐ // 4 //

森を荒らせば木々に花が咲かない。

街に行っても乞食の布施を得られない。

(28)

bolyā goraṣanātha machindra kā pūtā /

chārī naim̐ māyā bhayā avadhūtā // 5 // // 8 //

マツツェンドラナートの弟子ゴーラクナートは語った、マーヤー（迷妄）を捨てて遁世者となった。

guradeva syāmbha deva sarīra bhīmtariye /

導師は自生の神で身体内におわす。

ātmām̐ uttīm̐ma deva tāhī kī na jāṃṇaum̐ seva /

アートマンが最高の神だが、その奉仕を〔誰も〕知らない。

ām̐na deva pūji pūji imahī mariye // ṭeka //

ほかの神々を拝んで、こうして〔無駄に〕死ぬ。（繰り返し）

nave dvāre nave nātha tṛbeṇīm̐ jagannātha

dasavem̐ dvāri kedāram̐ // 1 //

〔身体の〕9門に9人のナートがあり、三河の合流点（眉間）にジャガンナート神があり、

第10門（頭頂の孔）にケーダールナート（シヴァ）神がおる。

joga jugati sāra tau bhau tiriye pāram̐ /

kathanta goraṣanātha vicāram̐ // 2 // // 9 //

ヨーガと理知の本質があれば彼岸に渡れる。ゴーラクナートは思慮深く説く。

manasā merī byaupāra bāmdhau pavana puriṣa utapanām̐ /

jāgyau jogī adhyātma lāgau kāyā pāṭaṇa maim̐ jāṃnām̐ // ṭeka //

私の心（意欲）よ、商いを始めよ、氣息・ブルシャが起きた。*

目覚めたヨーガ行者はアートマン〔の探求〕に専念した。身体という街に行かなければならない。（繰り返し）

*ここでは「氣息」と「ブルシャ」が同義として用いられていると考えられる。

ikabīsa sahaṃsa ṣaṭasām ādū pavana puriṣa japa māli /
ilā pyaṅgulā suṣamana nārī ahanisi bahai pranālī // 1 //

21,600〔回〕ほどの氣息・プルシャの念誦の連続 *

イラー・ピンガラー・スシュムナー脈管のなかを、昼夜、氣息が流れている。

* ヨーガ行の觀念をもとにして、原著者は、人が一日に行う日常の呼吸の回数が21,600〔回〕ほどであり、ヨーガ行者はこれによって"so 'haṃ haṃsah"（「それが我なり、アートマンなり」の意味）というマントラを無意識のうちに行う最高の「命息念誦」（ajapājapa）を行っているという觀念を表していると解釈している。

ṣaṭasām ṣoḍi kavala dala dhārā tahām basai brahmacārī /
haṃsa pavana ja phūlana paiṭhā nau sai nadī panihārī // 2 //

6弁と16弁の流れ、そこにブラフマチャーリンが住す。
ハンサ鳥（個我）・氣息を開花しようと浸入した、水遣りする九百の脈管が。*

* 「6弁と16弁」は、原著者の解釈によれば、それぞれハタヨーガが説く身体内の神経叢で、「6弁」はスヴァーディシュターナ・チャクラ、「16弁」はヴィシュツダ・チャクラを表す。

gaṅgā tīra matīrā avadhū phiri phiri baṇijām kījai /
aradha bahantā uradhaim̄ lījai ravi sasa melā kījai // 3 //

ガンガーの岸辺に西瓜〔がなる〕、遁世者よ、

あたりを廻って商いをせよ。

下に流れる流れを上にして、太陽と月を合一せよ。*

* 「ガンガー」はイラー脈管を、「西瓜」は冴えた智恵を、「上」は頭頂の孔を、太陽はピンガラー脈管、月はイラー脈管を象徴している。

canda sūra dou gagana bilūdhā bhaīlā ghora andhāram /

(30)

pañca bāhaka jaba nyandrā paudhyā pragḍhyā pauli pagāraṃ
// 4 //

月と太陽ふたつが虚空に消えて、漆黒の闇となった。
5人の運び人（5知覚器官）が眠りにつくと、城壁の門扉が現れた。

kāyā kanthā mana jogaṭā sata gura mujha lāṣāyā /
bhaṇanta goraṣānātha rūṛā rāṣau nagarī cora malāyā
// 5 // // 10 //

身体はほろ屑，心はヨーガ行者，正師が私に示してくれた。
ゴークナートは説く，〔この教えを〕慎重に保て，街に盗賊が放たれた。